

2008年12月7日(日曜日)



私の希望  
から私たちの  
希望へ

ふるさとに  
希望と夢を  
込めて



東京大学  
社会科学研究所  
教授  
ひろむつり せいご  
廣渡 清吾

# 希望へのアクション

福井県知事  
にしかわ いっせい  
西川 一誠

## 希望学がはじまります

生活満足度が高い福井県において、今後、さらに県民のみなさんの「暮らしの質」を高めるためには、希望や夢が必要です。今回、東京大学社会科学研究所で「希望」について研究している廣渡清吾教授と西川知事が、福井の希望について語り合いました。

### はじめに

西川知事

廣渡教授は「希望学プロジェクト」のメンバーとして、「希望」について研究されておりますが、まず、希望学とはどのようなものかを、お聞かせください。

廣渡教授

これまで、希望学という学問があったわけではありません。しかし、現代の日本の社会の中で「希望」というものが、どのように論じられるべきなのか。人々が、希望についてどのような問題を感じているのかを研究したいと思い、東京大学が2005年から始めた新しい学問です。

### マニフェストに希望と夢を描く

西川知事

私は、昨年の知事選挙のマニフェスト「福井新元気宣言」に、「未来に希望と夢を、ふるさとに自信と誇りを持てる『楽しみ』と『喜び』にあふれた理想の福井づくり」を目指すと、思いを込めました。

最近、また景気が後退していますが、6年前、知事の1期目の始まったころも、景気の状態が厳しく、経済を活性化して、福井を次の段階に発展させたいという気持ちで政策を実行していました。1期目が終わり、一定の成果を得て、福井県は、全国でも生活水準が高く、豊かな暮らしをしているとの評価を受けています。

しかし、県民の皆さんと直接お話しする「座ぶとん集会」などで、「福井には、娯楽が少ない」、「楽しみがない」との声を耳にしました。

当時、失業率などの数字は改善しましたが、数字にあらわれない県民の暮らしの中身はどうなのだろうか。県民のみなさんは、数字と同様の実感を得ているのだろうかという課題が出てきました。

新しいマニフェストに「希望」や「夢」を掲げたのは、県民の皆さんの「暮らしの質」や「満足度」を上げるためには、希望や夢が欠かせないと考えたからです。

新しいマニフェストでは、福祉、教育・文化、環境などの分野に重点を置きました。これらは、県民の皆さんにより身近で、生活を支える分野であるためです。



## 教育と希望

### 廣渡教授

今、福井県は、日本の社会の中で、非常に注目されています。様々な書籍やメディアで、福井県のことが取り上げられています。小さな県ながらも、生活水準や教育水準が高いなど、全国のNO1の位置にあると思います。福井県は、幸福な状況にあるといえるでしょう。

一方で、希望という話になると、福井の子どもたちは、将来に夢を持つということに関して、全国の子どもたちに比べて、その割合が低いという調査結果があります。これは一体どういう問題なのかと、私も考えさせられています。

希望と幸福という関係が、希望学の中でも一つの重要なテーマになっています。福井県の場合において、この問題がどのように考えられるか、福井県の事例から、全国に発信できる希望学の新しい知見というものが得られるのではないかと期待しているところです。

### 西川知事

地域の人が抱く希望観というのは、その地域の生活水準にもよりますし、地域性や風土性もあるのではないのでしょうか。

しかし、その中で、それぞれの自治体や、地域がより希望の程度を高めていくためには、どのような政策が必要かを考えることが重要だと思います。

先般、福井県出身の物理学者、南部陽一郎先生のノーベル物理学賞受賞が発表されました。

福井県は、かねてから、サイエンス教育を進めています。子どもたちに希望を持ってもらう意味で、大きなスケールの教育を進めて、その水準を上げていくと、そこにさらに大きな希望観が出てくるのではないかと考えています。



先日、アメリカに在住の南部先生に直接お電話したところ、「福井県で小さいころから、大学に行くまで教育を受けたことが今の自分を作っている」とおっしゃっておられました。さらに、子どもたちへ「大きい夢を抱いて 朗らかに生きよう」というメッセージが贈られました。まさに、「夢」、「朗らか」というのが、次の希望につながるのではないかと思います。

## 廣渡教授

福井県が、今まで築いてきたそのような条件を踏まえて、次に何を新しく築いて求めていくのかということが希望の話になります。

南部陽一郎先生もそのひとりだと思うのですが、今まで、福井の人々が作り上げてきた福井の教育を土台にして、世界の科学者に育て、大きくなられたのだと思います。

福井がこれまで築いてきたものを踏まえて、さらにどう福井の未来を展望するのかという中に、子どもたちの夢や希望があるのではないのでしょうか。

## 希望とつながり

### 西川知事

私から、希望とつながりに関する事例を一つお話したいと思います。

私が今住んでいるところの近くに市立の図書館があります。七夕のころに行う七夕飾りには、子どもたちが書いた短冊が付けられて、子どもたちは星に願いを託すわけです。

短冊に「ケーキ屋さんになりたい」、「ウルトラマンタロウになりたい」などがある中で、「おばあちゃんに長生きしてほしい」、「おじいちゃんの病気が早く治ってほしい」などの短冊も見かけます。

4歳、5歳の子どもの気持ちの中にも、自分がこうなりたいという願いのものと、家族や身の周りの人たちに幸福になってほしい、もっと良くなってほしいという「つながり」を意識した願いのものがあります。

小さな子どもの心の中にも、周りとのつながりを感じ、自分が一人でないと思うようになり、家族や社会とのつながりの意識が芽生えはじめているのかなと思います。

### 廣渡教授

希望がより実現性を高めるためには、私の希望から私たちの希望へ、つまり希望の視野が広がるのが大切だと思います。

自分のことではなくて、自分のおばあちゃん、自分の家族に思いが広がるということは、例えば、おばあちゃんが長生きしてほしいというのは単にその短冊を書いた子どもさんの希望だけではなくて、兄弟あるいは親御さん、つまりその家族全体で共有された希望なのでしょう。

そのように希望が広がっていくことによって、希望という意味、社会的な意味を私たちの研究の観点から見ると、広がりのある希望として見ることができます。そのような子どもたちが増えていくことが、福井の県全体の問題を考える一つの重要な条件と見ることができます。

## ライフサイクルとしての希望

### 廣渡教授

西川知事が提唱された「ふるさと納税」が実現したことは、とても意義深いことだと思います。

福井で育て、例えば東京に出て、そこで一家をなして、しかし、年を老いて、福井を見るときに、ふるさとの福井に何らかの貢献をしたい人にとって、「ふるさと納税」はその気持ちに応える有効な制度ではないかと思います。これを広げて見てみると、人々はそれぞれにふるさとを持っていて、つまり、人々の全てのふるさとを集めれば、日本ということになります。そういう意味では、人々が自分のふるさとを顧みて、自分のふるさとの発展を願って、自分の意思で何か行為ができるという制度を作ったということは、日本全体の底上げの有力な手段になっているのではないかと思います。

「ふるさと納税制度」は、都市と地方の対立を生み出すものではなく、日本全体の底上げをする制度になってい



るのではないのでしょうか。

#### 西川知事

福井県では、高校を卒業すると、多くが大学に進学します。年3,000人ぐらいが東京、大阪、名古屋などの大学に進学するのですが、4年後に戻って来るのは、1,000人あまり。つまり、2,000人ぐらいはそのまま大都市で生活しているという計算になります。

一方で、大都市で生活をして、再び福井に戻りたいとか、福井がふるさとだとか、そのようなつながりや期待、希望を福井県に対して持っていただくことは非常に良いことだと思っています。

「ふるさと納税」は、そのような気持ちを形にするものです。「ふるさとを思う人」と、「ふるさと」がどのような形で結びついて、それぞれのどのような希望になるかは、一つの楽しみでもあります。

## 行動と希望

#### 廣渡教授

人々のボランティアの例として、阪神・淡路大震災のボランティア行動があげられます。

その時の日本のボランティアには、自分がこの人々の災害について、何かショックを受けて、そのショックを受けた自分の気持ちを大切にしたいので、すぐに出かけて行って、何かするという関連が見られるような気がします。

そういう意味で、私は若い世代が、我々の世代とは違った新しい気持ちを持っているのではないかと考えています。そして、これが、次の日本にとって、プラスになるのではないかと期待しています。

#### 西川知事

廣渡教授は「A wish for something to come true by action」つまり、「希望とは行動することによって、なにかを実現しようとする願い」とおっしゃられています。

この言葉を借りれば、地域の人々が希望を持って、地域を良くしたいという思いにより、自立的に、アクションを起こせる人の存在が、地域の発展に欠かせないのだと思います。

## 地域に広がる希望

#### 西川知事

私は、希望のために自らアクションを起こす人がこの福井で育ってほしいと思っています。そのためには、まず個人が希望を持って、それが、地域に広がるような仕組みを作っていかなければならないとも思っています。個人の希望をふるさとに届けるものが「ふるさと納税」ですが、第二、第三のふるさと納税のようなものも考えていきたいと思っています。

今後も福井の希望を発展させるために、どのようなアクションを起こせるのかを考えたいですね。

#### 廣渡教授

私たちの研究所も、福井の希望を研究して、福井県民の皆さんに希望を見出してもらえるよう協力していきたいと思っています。

 **BACK**

